

# 日中科学技術

No.33

1983.6.20

発行所

日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島3-1-6  
小宮ビル2F 電話 03 (836) 4830

## 第18回常任理事会についての報告

6月4日、霞山会館で第18回常任理事会が開かれた。

出席者は次のとおりであった。

(会長) 有山兼孝, (常任理事) 越智勇一, 鹿取一男, 橋口隆吉, 和達清夫, (幹事) 鈴木昭憲, 相馬胤和, (事務局長) 肥後孝。

### I. 会長報告

(1) 東北工学院訪日団, 中国科学技術協会, 中国科学技術交流センターのそれぞれとの懇談について報告された(会報No.32号)。

(2) 本協会の招待留学生として昨年3月11日に来日し, 理化学研究所で計算機についての研修を行ってきた北京工業大学講師の劉星氏は研修期間を終了して6月26日に帰国することになった。5月28日, 理化学研究所で「劉星さんを激励し歓送する会」が催され, 本協会からは有山会長, 野上常任理事, 肥後事務局長が出席した。中国大使館からは王曉雲公使が出席されたが, この会は同公使の出席された公的会合の最後のものとなった。

なお, パナファコム社から「パナファコムC180 G型」計算機を本協会を經由して北京工業大学に贈られることになった。

(3) 1983年版「日本」が完成し, 中国諸機関, 駐日中国大使館その他に送付されたことが報告された。

### II 審議事項

(1) 昭和57年度事業報告および昭和58年度事業計画

表題の件について, 総会に提案する原案について検討された。

(2) 昭和57年度収支決算報告および昭和58年度予算

表題の件について, 総会に提案する原案について検討された。

(3) 協会規約の改正

(i) 協会運営の健全化のため, 前回常任理事会以後, 検討委員会が, 現行規約のうち, 財政関係事項について検討を行ってきた経過とその結論とが報告された。

(ii) 報告にもとづき, 現行規約9を次の主旨にそって改訂する方針がきめられた。

(a) 基本財産を新設して, 運用財産との区別を明らかにする。

(b) 基本財産は, 総会で承認された内規に基づいて, 会長がその管理運営の責任をもつ。一方, 運用財産の管理については, これまでの会計経理の原則と従来申し合せに従って行なわれる。理事会は資産の管理運用全般を見守るものとする。

(c) 基本財産には, 入会金の半額以上, 基本財産にあてることを明らかにして寄附された寄附金その他を充当し, 理事会が適当と認める範囲で逐年増を図り, 物価上昇に伴う協会財政基盤の弱体化防止に努める。

(d) 入会金は初年度会費を充当する。ただし,



賛助会費については、その一口の額を入会金として取り扱う。

(4) 講演大会の開催について

(i) 7月9日(土)総会当日の午後に開催する講演大会について、現在までの講演申し込み者と演題が報告された。

(ii) この講演会についての意見交換の結果は次のとおりである。

(a) 会員が日中科学技術交流の経験にもとづいて、毎年1回自由に講演する機会をもつこと  
中日友好協会に弔電

廖承志会長逝去の報に接し、有山会長は6月11日次の弔電を送った。

中華人民共和国北京市 中日友好協会  
ZHONGRI BEIJIN

廖承志先生の御逝去痛恨に耐えず、御生前の絶大な御友情、偉大な御功績を偲び、謹んで哀悼の意を表す。子々孫々にわたる真の友好を目指す先生の言葉に触れる機会いまやなし。

先生の御遺志を承けつぐ日中両国人民の広く深い友好の益々発展することを期待して御冥福を祈る。

日中科学技術交流協会会長 有山兼孝

とは有意義である。本年はその第1回めの大会とすることが了承された。

(b) 橋口会長代理、鹿取常任理事、幹事を中心に実行委員会を構成して、大会の諸準備と運営に当ることになった。

(iii) 小講演会の開催

年1回の定例講演大会のほかに、小講演会または専門に係わる小集会を開く方針を再確認し、計画の具体化に努めることとした。

(5) 役員改選

本年度は改選期に当たるが、原則として現役員再任の方針とすることが了承された。

日中科学技術交流協会

第1回 講演大会

1983年7月9日(土) 3時より

神田錦町 学士会館

I. 講演大会プログラム

13.00-13.10 (開会司会 鈴木昭憲)

会長挨拶 日中科学技術交流協会会長  
有山兼孝

13.10-13.40 (座長 越智勇一)

科学技術の交流について  
駐日中国大使館参事官(科学技  
術担当) 夏允賦

13.40-14.10 (座長 野上茂吉郎)

日中鍼灸医学交流訪中団に参加して  
岐阜歯科大学口腔生理学教室助  
手 川喜田健司

14.10-14.40 (座長 近藤二郎)

中国瀋陽における環境技術交流について  
京都大学教授 農学部農芸化学教室  
小林達治

14.40-15.00 休憩

15.00-15.30 (座長 田村三郎)

Make haste, but steadily  
帯広畜産大学教授 農産化学科  
藤野安彦

15.30-16.00 (座長 鹿取一男)

中国との古人類・古文化研究における交流



別府大学教授 同大学アジア歴史文化研究所長

二宮淳一郎

16.00-16.30 (座長 渡辺武男)

昆明・成都紀行

日本学士院, 日本環境協会会長

和達清夫

16.30-16.35

閉会の挨拶 日中科学技術交流協会常任理事, 会長代理

橋口隆吉

## II. 講演要旨

日中鍼灸医学交流訪中団に参加して

川喜田健司

大学の研究室に籍を置き、針麻酔のメカニズムを中心に基礎医学的研究を行なっている関係から針麻酔の発祥の地、鍼灸医学の発祥の地である中国へは、是非訪れたいと考えていた。そのようななかで、今回の訪中団を知り、その内容が学術交流を主とする点に賛同し、さっそく応募した次第である。

今回の訪中の日程・学術交流の具体的な内容、講演要旨等は、報告書を参照していただき、ここでは実際の中国での鍼灸治療、臨床研究、基礎研究を見て印象深かったこと、今後の鍼灸医学の学術交流の在り方等についてまとめてみたい。

中国での鍼灸治療は、一日の外来患者数が1500-2000人、ベット数400床という大きな病院で鍼灸科として独立し、一日平均150-200人の外来患者の治療にあたる外、病床を持って入院治療も行なわれていた。鍼灸科を訪れる患者は、自分の意志で選択して来院しており、鍼灸の有効性の一端がこの事実のなかに示されていると思われた。また、鍼灸科と外の西洋医学の科の間でも、相互交流に基づいて患者の検査・診断が行なわれているが、そのなかでも鍼灸科では、弁証論治に基づく治療方針を貫いていた。これは中国の医療における鍼灸医学の位置づけが、単に西洋医学を補助する立場ではなく、独自の有効性を持つことを認めた上

で、中西合作の更により良い医療の在り方、治療の在り方をめざしていることの表われであり、大いに学ぶ必要のあることを痛感した。そして、日本の現状である医療類似行為としての鍼灸治療の位置づけを、一刻も早く正当な医療としての鍼灸医学へ高めることが、鍼灸医学の研究のうえでも重要であると思われた。

学術交流の面を感じた事は、今回は第一回目ということで、団員の内部での準備が十分になされておらず、中国側から学ぶという形になったが、やはり十分な準備期間と内部学習を行ない、テーマを絞ってゆくことが、今後の学術交流を進展させてゆくうえで必要であろうと思われた。また、通訳をお願いする際、鍼灸医学の考え方、用語等に十分な知識がないと、スムーズな意見の交換は難しいことを留意してもらった必要性を感じた。

今回の訪中は、わずか2週間の短期間にもかかわらず、北京・上海の数多くの研究所、病院で、臨床の現場へ入ることを許され、医師・患者と直接対話することが出来、実際の鍼灸臨床の姿、その雰囲気まで体験できたことが、大きな収穫であった。もちろん、北京医学院・上海脳研究所の訪問、龍華病院での針麻酔の手術室へ入室を許可されたこと、また、いくつかの観光旅行、サーカス見物、宴会を用意していただき、大いに楽しませてもらった事など、我々訪中団のために、いろいろとお世話いただいた中国科学技術協会の先生方には深く感謝するものです。しかし、団の本来の目的からすれば、時間の許すかぎり学術交流を深めたかったと感じているところです。観光とは別の目的での訪中団という点をはっきりさせておく必要があるように思われます。

今回の訪中団の団員は経験も浅い者が多く、学術交流という意味では十分にその任務を果たしたとは言い難いものですが、実際の中国における鍼灸の臨床の姿、医療制度のなかでの地位を知り、貴重な資料・研究成果を学べたことは、今後の鍼灸医学の発展に大いに役立つものだと考えます。今後とも日中の鍼灸医学交流がますます盛んとなり、



学術交流を通じて、より鍼灸医学が発展することを心より切望する次第です。

最後に、今回の訪中にあたり、いろいろとお世話いただき、協力いただいた、中国・日本の関係する諸先生方に厚く感謝の意を表します。

中国瀋陽における環境技術交流について

小林 達治

### 要 旨

昨年7月末～8月初旬にかけて瀋陽科学技術交流協会主催の講演会に出席した際、日本の環境技術を中国技術者に指導することを約束してきた。

去る3月～4月下旬にかけて中国科学院林業土壤研究所副所長呉維中先生、瀋陽市副市長張榮茂氏の来日を果し、さらに中国人技術者3名(内通訳1名)の1カ月間の研修に便宜をはかり、技術の修得に協力した。また、その中国における実用化のための協力として、この8月末から再度中国へ技術者を派遣する予定などについてお話しする。(事務局補記)5月末上記要旨提出後、6月上旬実行委員会で前刷概要提出方針を決定したのち、小林教授との連絡を図りました。しかし、同教授は海外出張のため、会報原稿に間にあるように概要作成することは不可能なことが判りました。このため、当初提出の要旨をここに掲載します。

Make haste, but steadily

藤野 安彦

昨秋、中国の主として東北地域を2週間ほど旅行して、食糧科学を中心とする交流を行なった。短期間の講演旅行であったが、この体験を通してえた幾つかの見聞を、所感ないし提言などともに述べてみよう。

#### 1. 日程のあらまし

この旅行は、瀋陽に6日、長春に3日および北京に6日、計15日間の行程であった。主な行事は食糧科学と油脂技術に関するそれぞれ10回ずつの講義ならびに討論で、その間に、農業・食糧関係の研究所、試験場、工場などの見学、名所や旧蹟の歴訪、その時どきの懇親会など、かなり盛り沢山の日程が組んであった。全旅程を通じて、中国

側の応待はまことに至れり尽くせりで本当に恐縮したのであった。半面、日程の大筋はすべて先方の配慮によるものなので、こちらの希望が容れられなかったり、スケジュールに過密な所もないではなかった。

#### 2. 講義・討論の概況

中国側の要望に基づいて、食糧事情、栄養問題、脂質研究および油脂利用の4つのテーマについて講義を行なった。米聴者のほとんどは工場、研究所、大学などの中堅の科学技術者で、学生は余りいなかった。これは、この分野の人たちが少ないと言うことらしい。討論での質問は、基礎よりはむしろ実務に関するものが多かった。講義・討論は、通訳を介してなされたが、さすが優秀な通訳の人達も専門領域の通訳には大分苦勞していたようだ。中国でも英語が第1外国語というから、専門用語ぐらひは英語で理解し合うようにするのがよいのではあるまいか。

#### 3. 食糧科学の現状

食糧科学の範囲は広いが、ここでは、食糧の1次生産(農業)、2次加工(製造)、および3次利用(消費)の科学技術と考えよう。中国は昔から農業国とされて来たが、実際には、農業生産は長い間振るわなかった。今、これの飛躍的向上が国の大目標とされているが、農業近代化を急ぐ余り、機械や農薬に頼りすぎる傾向も時に見られるという。他方、1次農産物を2次的に加工して、3次利用に価値を付加するという方向も強く打ち出されている。しかし、食糧の2次加工、3次利用の開発は、食糧の流通システムの拡大などと相まって、まだ今後の課題のようだ。

#### 4. 科学技術への対応

中国の科学技術は、「文化革命10年の動乱」で手ひどく傷めつけられたのだが、今は、科学技術こそが生産力の源泉であるという考え方で、中国がこれに注ぐ熱意はきわめて大きい。その筆頭が農学と農業である。中国の科学技術は、国家科学技術委員会が研究の大方針を策定し、科学院、大学などが研究を実施し、科学技術協会が研究を普



及する、という姿勢の中で推進されているようだ。ひとつのやり方であろう。ただし、このシステムの根幹をなす大学や科学院での研究体制は、農業食糧に関する限りでは、まだかなりの遅れがあると感じられた。

#### 5. 何をどうしたらよいか

食糧科学をはじめ一般に科学技術が低い水準にあるのは、中国の人たちがよく口にするのである。だから、それを高めようとする意欲には並み並みならぬものがある。だが、焦って、知識の断片をかき集めたり、耳学問だけに頼ることは避けるべきであろう。どんな時も科学技術は、じっくりと基礎から着実に積み上げることが大切である。その意味で、中国の大学が科学技術に関する教育研究の緊密な体制を確立すること、日中の学術交流を散発的ではなく体系的に展開すること、などはとりわけ重要であると思われた。

#### むすび

中国は可能性にみちた大人の国である。急ぐのはよい、だが、悠々と着実に行こう。それが実は、科学技術進展の王道なのである。

#### 中国との古人類・古文化研究における交流

二宮 淳 一 郎

1962年、中国科学院古脊椎動物古人類研究所副所長吳汝康の著書『巨猿下顎骨和牙齒化石』をめぐって論争がおこった。巨猿とは広西チワン族自治区で出土したギガントピテクスで、その系統的位置についてケーニヒスワルト、ワイデンライヒ以来くりかえし論議されたものである。吳汝康は新しい資料をもとに、これが真の人類といえないまでも、人類起源にいたる前人段階にあるものと推定した。これに反論する人たちは、人類と社会の発生は同時的であるとして、前人段階の設定を認めようとしなかった。

この論争は1977年まで続いたが、これが吳汝康との交流の契機となった。

1980年はじめ、吳汝康はおなじ研究所の周明鎮とともに来日した(会報第13号)。日本学術振興会、人類学会、第四紀学会の招きによる。この

日程の中で吳汝康は、別府大学で「中国古人類研究の成果と展望」などの講義・講演を行った。巨猿をめぐる論争には特に深入りしなかったが、中国における古人類研究の最近の成果についての系統的解説は、われわれの理解を深めさせた。その内容は、他の資料・論文を合わせて『古猿・古人類』として出版された(同大学付属博物館刊)。

同年夏、別府大学は人類史と美術史を含む学術調査団を中国に送った。人類史関係のメンバーは、北京で上記研究所、周口店遺跡、自然博物館等を見学した。

1981年、同大学はアジア歴史文化研究所を設置し、同年12月再度の訪中団を組んだ。この団は、課題を人類史にしぼり、日中科学技術交流協会の斡旋のもとに中国科学院の配慮をえて、大きな成果をあげることができた(会報第24,25号)。北京・西安・昆明・上海を經由した15日間に研究所3、遺跡3、博物館11を訪ね、37名の研究者と交流した。

特筆すべきは、当時発掘中の雲南省禄豊古猿遺跡を視察できたことであろう。人類起源解明のカギを握るラマピテクスの頭骨が、同時代のシワピテクスのそれとともに、世界ではじめて発見された現場である(会報第19号)。

ラマピテクスは、古くから人類最古の祖先と考えられ、吳汝康らも現地でするように説明した。にもかかわらず、翌1982年秋、彼自身がそれを修正する意見を発表したことがわが国にも報道された(会報第31号)。別府大学は、その年の冬ふたたび吳汝康を招聘した。彼は別府と福岡で、形質および分子人類学的にみて、ラマピテクスはオランウータンの系統にあり、シワピテクスと同類型の雌個体であろうという詳細な検討結果を発表したのである。この新しい見解は内外に波紋をひろげつつあるが、問題の解決は将来に残されるだろう。

現在、筆者らは人類史に関連するいくつかの交流計画を立てている。中国研究者との大学における共同講義、研究図書共同編集と日本での出版



などではすでに基本的な合意の上で準備を進めており、さらに人類遺跡の共同調査も検討中である。

本年度、人類史教育研究訪中団を組織し実施する。これは本協会の後援のもとに、別府大学上記研究所、九州生物学教育研究グループ、科学教育研究協議会九州ブロックが共同して組織したもので、小・中・高校および大学教師が参加する。

中国科学技術協会と本協会との懇談(会報第25号)の中でとりあげられた青少年の科学知識普及の交流案件とも関連して、新しい分野の交流の一つとして成功を期したいと考えている。

昆明・成都紀行

和達清夫

中国科学院の招待を受けて、私は宇野佐氏(専攻林学、日本環境協会常務理事)と二人で4月14日より24日まで、両国の環境問題の交換を主目的とし北京・昆明・成都・上海等の中国各地を訪れた。主な訪問先は、(北京)では環境化学研究所、遥感応用研究所、城建設環境保護部、北京環境保護研究所、(昆明)では昆明動物研究所、昆明植物研究所、雲南民族学院、(成都)では四川省気象局、都江堰、その他(上海)では植物園、(蘇州)では刺繡(しゅう)研究所等であった。

今回の中国訪問において、同国の環境問題について感じたところを述べれば大たい次の如くである。

(1)中国は大陸の広い国であり、日本とは自然条件が異なるので、汚染は拡散が遅く溜り易い。(2)中国では現在では冬期石炭による大気汚染が一番問題である。(3)水質汚染や騒音やその他の公害も既に起りつつあり、早期対策が望まれる。(4)都市の並木や山地の植林など環境造りがよく行われている。(5)開発と保全との調和についての問題はこれからの大きな問題である。(6)わが国の公害対策の経験は中国のよい参考となるであろうが、中国には独特のものがあり、自然科学的にも社会科学的にも両国の間の環境問題に対する学術交流を今後一層盛んにすることは意義深いものと考えられる。

以上は中国科学院の一方ならぬ厚配によって行われたものであることを記してここに衷心より感謝の意を表す。すなわち同院院長盧嘉錫氏や崔泰山氏等の歓待のもとに、私たちの中国における行動には終始通澤柳修彰氏を派遣され、また各地同院分院に私どもの世話を手配され、ここに何等支障なく十分に訪中の目的を達することができたのである。

## 最近の中国科学技術

中国で漢字マイコンシステムの開発に成功

[北京4月20日発新華社=中国通信]中国で汎用性が広く、使用の簡単な漢字マイクロコンピューター・システムの開発に成功し、このほど中国科学院技術科学部と広東省科学技術委員会などがこの成果について鑑定を行った。

同システムは中国科学院計算技術研究所、広東省電子技術研究所、郵電部広州通信設備工場が協力して開発したもので、かなりの漢字処理能力を備えている。漢字の入力方式は柔軟多様で、大小のキーボードを結びつけて使用する。スモールキーボードは標準テレグラフィコード、キャラクターコード、筆画コードなどのプログラムを系統的に提供するほか他のプログラムも自由自在につくっ

たり選んだりすることができる。ソフトウェアは比較的豊富で、とりわけ漢字関係データ・ベースなどの応用ソフトウェアを導入したことによって、事務室の作業自動化、情報管理、事務管理などの分野に同システムを使用するよい条件が作られた。またこの漢字マイクロコンピューター・システムは長距離通信機能も備えており、電話線を通して、他の計算機との一対一の文書伝送が可能である。システム全体の設計は、モジュール化、標準化、シリーズ化がはかられている。

鑑定会は、同システムの設計は国内先進水準に達していると認定した。全国50余単位の代表および国务院電子計算機・大規模集積回路(LSI)難関攻略指導小組弁公室責任者らがこれに参加した。



## ・中国、医学物理学の研究・応用で好成果

〔昆明5月9日発新華社=中国通信〕昆明で開催中の第2回中国医学物理学会理事会に参加している専門家たちは、ここ2年来、中国の科学関係者は医学物理学の研究成果を臨床実践に応用し、医療事業の発展に積極的に貢献していると語った。

医学物理学は医学と物理学にまたがる新興の学際科学で、物理学の理論と方法を応用して人体器官の機能と構造を明らかにし、診断・治療の方法と機器を研究するもの。ここ数年、中国ではこの学問の研究が急速に進んでいる。北京第二医学院、浙江医科大学、浙江中医薬研究所などはマイクロ・コンピューターを使って医師の診断や処方を経験を保存しており、同様の病状の患者に出合ったときは、コンピューターによって診断、処方、病人への指示を中国語ですみやかに打ち出すことができる。コンピューター技術を漢方医学の分野に導入することは、名医の貴重な経験の継承・研究に近代的手段を提供するものであり、「電算漢方医」とたたえられている。江西医学院などが1981年に研究に成功した世界最新の恒圧式アドミタンス・チャート器は心臓から送り出される血液量の測定に最適である。

この2年間、中国の科学関係者は医学物理学の基礎理論研究にも少なからず心血を注いでいる。このほど閉幕した第2回中国医学物理学会年次総会には190編の学術論文が提出されたが、論文は前回に比べ数が著しくふえ、質も目立って向上し、なかには国際医学界から重視されたものもある。

## 第3回中米科学技術協力合同委閉幕

〔北京5月11日発新華社=中国通信〕会期2日間の第3回中米科学技術協力合同委員会が11日、人民大会堂で閉幕した。

会議終了後、中米双方は第3回合同委員会報告に調印した。中国側首席の方毅国務委員兼国家科学技術委主任と米国側首席のキーワース大統領科学技術顧問・ホワイトハウス科学技術政策局長がそれぞれ報告に署名した。

会議に近い筋によると、会期中、合同委員会は

第2回会議以降の17分野の協力を振り返った。17の分野とは留学生・学者、農業、宇宙技術、高エネルギー物理、科学技術管理・科学技術情報、計量・規格、大気、海洋・漁業、医薬衛生、水利電力、地学、地震研究、環境保全、基礎科学、建設・都市計画、原子力安全、地表水水文学である。

合同委員会は双方の協力の基本政策および具体的問題について討議し、将来の活動について意見を交換した。また、双方が他の新しい分野を積極的に探っていくことを決定した。

合同委員会は、第2回会議以降、科学技術協力計画が新たな進展をみせ、協力が実りあるものであったことに留意した。大多数の協力分野で、実質的な協力活動がすでに展開されており、幾つかの分野の協力活動はかなりはやく進んでいる。双方は科学技術協力計画が双方にとって有益であり、両国関係の発展、とくに科学技術界の連携強化に寄与したことを確認した。

また中米双方は同日、核物理学および磁氣的閉じ込めによる核融合研究の協力に関する議定書、航空科学技術協力議定書、交通科学技術協力議定書、生物医学了解備忘録に調印した。

## 中国で2×2.2ギガ電子ボルト衝突器建設へ

〔北京6月5日発新華社=中国通信〕中国科学院は北京西郊外に2×2.2ギガ電子ボルトの電子・陽電子衝突器を建設する。

この衝突器は中国科学院高エネルギー物理研究所の高エネルギー加速器センターに建設される予定。同研究所の科学者はすでに物理設計を終え、現在この衝突器の中核設備の事前調査と同施設の初歩設計を行っている。同施設は1988年に完成の予定。

同衝突器の建設は高エネルギー物理の研究・実験の推進を目的としたもので、これによって真空紫外線やX線などのシンクロトロン放射光源が得られる。同施設の完成は中国の基本粒子の理論・実験研究とシンクロトロン放射の応用に重要な役割を果たすものと見られる。

高エネルギー物理研究所ではまた、昨年稼働を



始めた10メガ電子ボルトの陽子線型加速器を35メガ電子ボルトに拡張する予定である。

#### 中国科学院, 新材料41件を重点研究

〔北京6月4日発新華社=中国通信〕高分子抗ガン剤, 赤外光学ガラス, 太陽電池など4つの現代化や人民生活に密接な関係のある41件の新材料の研究が中国科学院の重点研究項目に指定された。

中国科学院はこのほど新材料研究プロジェクト会議を開き, このうちすでに進行中の27課題について点検し, 新たに取り組む14課題についてフィージビリティスタディを行った。

関係筋によると, これら新材料研究の内訳は金属材料が12件, 無機非金属材料が11件, 有機・高分子材料が14件, その他4件となっている。

これらの研究成果があがれば中国のエネルギー, 情報, 生物・医学, 先端科学技術, 工業生産の発展に重要な意味をもつことになる。例えば, 海洋石油探査開発における金属材料の腐食と防護の研究, 有機シリコン乳剤の研究, 新型赤外光学ガラスの研究などは重要な経済的価値をもっている。

中国科学院で材料および材料研究にたずさわっている研究所は28カ所におよび, 関係する科学技術者は2500人にのぼる。科学院は研究および成果の普及を促進するため, 新材料中間試験基地の設立を決めている。

#### 姜聖階氏, 原発促進で提案

〔北京6月9日発新華社=中国通信〕第6期全国人民代表大会(全人代)代表で, 有名な原子力工業専門家姜聖階氏は, 「中国が現在着手している原子力発電開発は, 可能であるばかりでなく, 先へ延ばせない重要なことである」と指摘した。

これは, 同日付「経済参考」紙に掲載された同紙記者とのインタビュー記事で明らかにされたもの。

姜聖階氏は前第2機械工業部副部長, 現原子力工業部科学技術委員会主任, 中国原子力学会常務副理事長。姜氏は, 次の3つの面から中国の原子力発電開発をはやめるよう提案した。

1. 長期発展計画をつくる。今回の全人代会議

で, 私はシステム工学の方法をとる, つまり数学的モデルを研究し, 原子力発電開発の最適プランをさぐるよう国に提案するつもりである。

2. 資金問題の解決に留意する。原子力発電所完成後の発電コストは非常に安い, 建設資金はかなり大きい。これまで原子力発電所をなかなか建設できなかったのは, 認識上の問題のほか, 資金不足も重要な原因であった。基盤整備全体に占めるエネルギー建設投資の割合を20%ないし30%まで引き上げるべきであり, これではじめて原子力発電所を含めたエネルギー工業全体の需要を満たすことができる。従って, 国がさまざまなルートで財源を広く集め, エネルギー開発基金を設けることを提案する。地方と共同で原子力発電所を建設し, 外資, 華僑資本および国内の遊休資金などを吸収してもよい。

3. 原子力発電所の建設を強力に進めるという重責を自力で担うため, 外国の大型原子力発電所の先進設備と技術を積極的に導入し, 国内の研究と結びつけて中国独自の整った原子力工業体系をすみやかに確立する。

姜氏はまた, 長期的な利益から見て, 原子力発電開発をエネルギー問題解決の一策とすべきであると指摘した。

#### 光明日報の科学技術関係記事

(※印は翻訳サービスします。会報No.28会告参照)

\* 科学基金, 科学技術者は誰でも申請できる(5. 6, 900字)

\* 科技立国のためには出費が必要, 日本では10年で3倍増(3. 21, 1700字)

\* 理工系大学教育改革のいくつかの問題(3. 16, 2970字)

\* わが国計算機事業発展の新時期(4. 29, 1600字)

\* 機械製造技術語彙(150余万語)が編成される(4. 28, 830字)

\* 核医学電子学学術会議が北京で開かれる(4. 22, 160字)

\* 針灸穴名の秘密を探求する老年漢方医(4. 10, 1400字)